

史料紹介 前津小林文庫所蔵「御即位記 貞和度」

野村 朋弘

一、はじめに

前津小林文庫（以降、文庫と略す）とは、愛知県名古屋市にある一般社団法人の文庫である。郷土史家の故山田幸太郎氏が蒐集していた史料群を所蔵している。史料群を蒐集した山田幸太郎氏は明治二三年（一八九〇）生まれ、昭和四一年（一九六六）に没している。地域の名士として様々な活動を行い、郷土史に関しては、名古屋史談会等に属し史料蒐集にあたられたという^①。

その後、山田家の土蔵で保管され続けた史料群について、筆者が調査・整理の依頼を受けたのは平成二八年（二〇一六）のことであった。土蔵では宝暦五年（一七五五）の銘がある本箱などに納められており、史料整理のため、土蔵にあった和装本・洋装本すべて別室に移動し、以降作業を継続している。和装本は約八〇〇冊に及び、洋装本については未整理である。

整理については、筆者の他、角田朋彦、比企貴之、田中葉月の諸氏にも参加していただき実施している。

史料整理は半ばではあるが、確認出来るところでは、山田幸太郎氏が蒐集した史料と、山田家が所蔵している山田家文書の二種類に分けられる。

まず山田家文書については、明治期の戸長資料や、文化財審議委員の記録などがある。

蒐集された史料群については、東海地区を中心とした歴史に関するものの他、易・茶・俳諧・陶芸など多岐にわたる。多くは近世の写本及び版本である。

史料群は、他家の様々な蔵書を購入蒐集して形成されている。例えば延享五年（一七四八）の櫻井『漏刻説』には、山田氏の蔵書印の他、「不忍文庫」と「阿波国文庫」、「渡辺文庫珍藏書印」がある。不忍文庫とは、江戸時代後期の国学者である屋代弘賢の蔵書印である。彼の没後に大部分が阿波藩の蜂須賀家（当時の当主は斉昌）に譲られ、阿波国文庫に加えられた。一部分が流失したものの、大部分は近代になってから県立図書館に委託される。しかし第二次世界大戦での空襲と、昭和二五年（一九五〇）の火災によって焼失したという。渡辺文庫とは

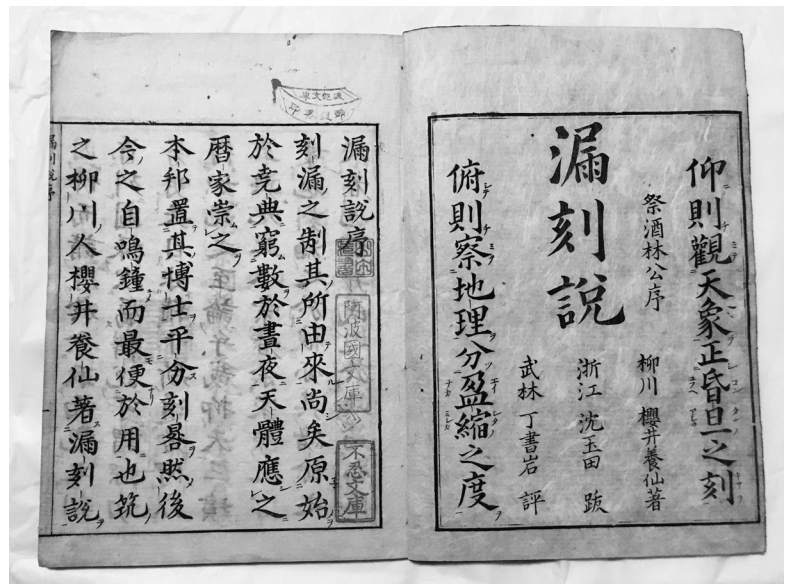


図1 櫻井養仙「漏刻記」（仮整理番号〇六九三）

法科大学講師の渡辺信の蔵書印であり、大正一三年（一九二四）に東京大学に寄付されたといわれている。文庫が所蔵している『漏刻説』は、屋代弘賢が所蔵していた書籍としても、また来歴が分かるものとしても大変貴重なものである。文庫所蔵の史料については、この他、尾張国を中心とする国学者の蔵書印があり、東海地区の国学者の活動がみてとれる。蒐集史料の購入履歴なども遺されており貴重である。これらは山田氏の蒐集履歴を知ることが出来る他、近代の史資料蒐集家のネットワークの一端を解明すること出来る。今後、史料整理と調査を継続することによって史料群の詳細が明らかになれば、東海地区の地域史研究はもとより、近代における郷土史家の果たした役割を知ることが出来る文庫となる。

二、「御即位記」について

文庫所蔵の史料群の中で今回紹介したい史料が「御即位記 貞和度」である。貞和五年（一三四九）に即位した崇光天皇の即位儀式の記録である。崇光天皇は北朝の三代目の天皇であり、光厳上皇の院政のもと即位した。

折しも、在位中には足利幕府内の高師直と足利直義の対立から端を発する観応の擾乱があり、観応二年（一三五二）に南朝によって廃位された⁽²⁾。

これまで北朝研究の中でも、正平一統後の崇光院については言及されるものの、即位に関わることなどは、あまり研究がなされていない。本史料の「御即位記」はかかる崇光天皇の即位儀式に関わる貴重な記録といえよう。

この「御即位記」は、宮内庁書陵部と京都大学、立命館大学に写本がある。「崇光院貞和即位記」などと題されている。書陵部のものは寛文三年に葉室頼業が写したものである⁽³⁾。

また刊本としては、『園太暦』⁽⁴⁾、『大日本史料』⁽⁵⁾、『崇光天皇実録』⁽⁶⁾などがある。

内容としては、洞院公賢・中院道冬・正親町三条公継の日記の抄出である。文庫所蔵の「御即位記」の一丁目には

「貞和御即位記（十二月廿六日当日）」

御記 源大納言通冬記

新大納言実継記」

とあり、内容から鑑みても、洞院公賢の執筆にかかる別記といえよう。

洞院公賢は、崇光天皇の即位に際して内弁を勤めることになり、詳細な記述を遺した。但し、閣外のことは不明な点もあつたため、中院通冬と三条実継に次第を尋ね、日記を写し自身の別記に収めたのであろう。

また中院通冬の記した『中院一品記』は、北朝の政治的動向を知る貴重な史料であるが、自筆本には貞和五年の崇光天皇即位に関するものは遺されていない。

つまり『園太暦』『中院一品記』ともに該当時期は後世の写本によって補われている。さて、今回紹介する文庫所蔵の「御即位記」は、全二二丁からなる冊子装本（袋綴装）である。法量は縦二七、二センチメートル、横は二〇、四センチ

メートルである。

二丁目の「御記」の袖には「大炊御門藏書」と朱の藏書印と、「前津文庫」の黒の藏書印がある。大炊御門家が所蔵していたものを、後世、山田幸太郎氏が入手され、前津文庫の藏書印を捺したのであろう。

また奥書には、慶長九年（一六〇四）四月に西園寺実益が写し留めたものを寛文三年（一六六三）三月に、権大納言藤原経光が写したものとある。寛文三年（一六六三）正月に霊元天皇の践祚し即位式は四月に行われている。こうした中で宮内庁書陵部が所蔵している「御即位記」と同様に写本が行われたのであろう。

この「御即位記」は、宮内庁書陵部が所蔵している写本とは別系統のものであり、また『園太暦』『中院一品記』といった北朝の廷臣の日記も、該当期の写本の数が少ないため、貴重といえる。

「御即位記」の確認作業を行ったところ、洞院公賢の「御記」の箇所については、『園太暦』所収の甘露寺親長の写本と異同が無かった。

そこで今回は、他の写本と幾つかの異同がみられる源大納言通冬記の翻刻を掲げ紹介を行いたい。

通冬は崇光天皇の即位式にあつて外弁を勤めた。つまり「閣外」の責任者である。

一五丁目の冒頭にある「閣外儀不審之間、相尋源重相之處、被示送之、」は、公賢から通冬へ門外のことについて確認があり、それに答える形で通冬は日記の該当箇所を伝えたものだろう。

『園太暦』貞和五年十二月廿四日条には、「大礼事、源大納言、新大納言等、度々有問答、続左了」とあり、中院通冬からの質問の書状と、それに対する公賢の回答の書状が写されている。中院通冬はこの年の九月に大納言となり、はじめての外弁を勤めることとなった。そのため、碩学の誉れ高い公賢に、儀式について度々質問を行ったのであろう。公賢の記す「閣外儀不審」とは、質問というよりは、滞りなく門外のことが行われたのか、その確認のためだったのかも知れない。

「朝家凋弊」の中、北朝の公卿たちは前例に則り、即位式を催すべく努めた。今後の北朝研究、儀礼研究において本史料が活用されることを望みたい。

- (1) 註
吉川芳秋「博通の郷土史家山田幸太郎さん」、名古屋郷土文化会編『郷土文化』二一巻一号、八五号、一九六六年
- (2) 近年の研究としては久水俊和・石原比伊呂編『室町・戦国天皇列伝』（戎光祥出版、二〇二〇年）があり、池和田有紀が「崇光天皇」を担当されている。
- (3) 宮内庁書陵部が所蔵している「崇光院御即位記」は、寛永五年に中院親顕が写し、それを寛文三年に葉室頼業が写したものである。その他、伏見宮家本も所蔵されている。
- (4) 岩橋小弥太・斎木一馬校訂『園太暦』卷三、続群書類従完成会（現在は八

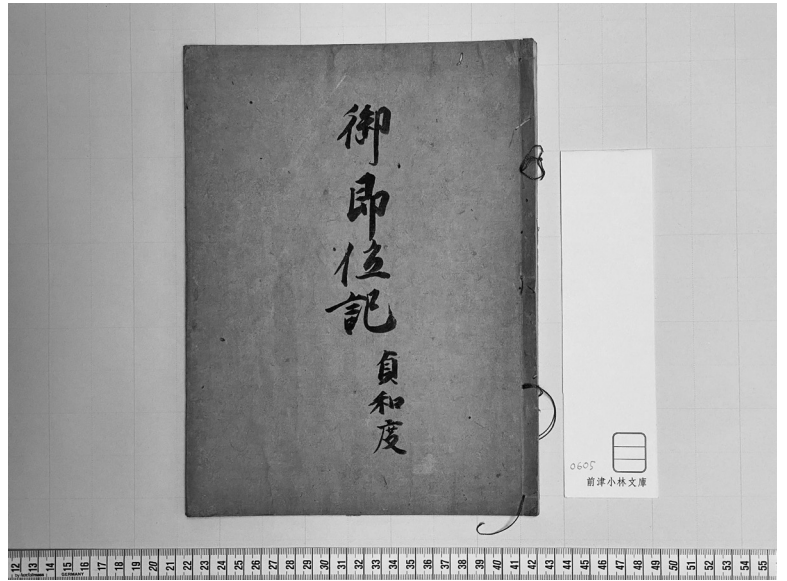


図2 「御即位記 貞和度」（仮整理番号〇六〇五）

- (5) 本書店、一九七一年。今日では一部が公賢自筆本として現存するものの、多くは甘露寺親長や三条西実隆らの抄本である。貞和五年の秋・冬については、刊本の『園太暦』の凡例にも「夙くより散逸して、流布の諸本は咸之を闕く、幸いに三条西伯爵家に親長卿の自筆本を襲蔵せらるゝことを知り、同家に懇請して、新に補入することを得たり。」とある。
- (6) 『大日本史料』第六編之十三、東京大学出版会、一九一四年。本書に記載されるのは「伏見宮御即位記」にある「御即位記」である。
- 『崇光天皇実録』ゆまに書房、二〇〇九年。本書に記載されるは大日本史料と同じく、「伏見宮御即位記」にある「御即位記」である。

史料翻刻の凡例

- 一、前津小林文庫所蔵「御即位記 貞和度」（整理仮番号〇六〇五号）を用いて翻刻を行った。原本の閲覧・翻刻を許可された前津小林文庫には、この場を借りて深謝申し上げる。
- 一、本記録は、本来であれば洞院公賢の執筆に掛かる崇光天皇の即位記及び、関連史料を写したものであろう。公賢の執筆した原本は現存しておらず、写本のみが遺されている。今回は特に「源大納言記」である中院通冬の日記部分の抄録を翻刻した。
- 一、本記録の原本は、冊子状になっている。
- 一、使用文字は原則として新字とした。古体・異体・略体文字は直した。またおどり字は「々」を用いた。
- 一、本文の改行については原本に従った。
- 一、校訂にあたって、本文中に読点（・）と並列点（、）を加えた。
- 一、改丁は……で表し、丁数を付した。
- 一、文字の訂正に関するものは「」を本文の右傍に付し、校訂注や人名その他については（ ）を本文の右傍に付した。
- 一、本文中の○は挿入符を示し、挿入文言は本文の右側に傍書した。
- 一、割注内の、割注については、へで表記した。

「御即位記」

(表紙)

御即位記 貞和度

(二五丁)

閣外儀不審之間、相尋源^{アシヤウ}亜相之處、被示送之、

(朱筆)
閣外儀源大納言記

貞和五年十二月廿六日、御即位外弁儀、

未刻許通冬着礼服^{駕網代車、遣牛飼、前驅二人、路次間垂簾}、参太政官庁、於郁

芳門代下車、至官庁異角辺、改着烏皮鳥、^{但件所無含羅門代之間、召六位史盛宣}

^{尋之處、在外弁幄後之由申之、可為此所歟之由仰之、仍披見今度装束圖、打件門代畢、}

次着外弁幄^{第二元}、先之冷泉宰相一人^(經隆)在此座、

上皇御車^{(光嚴院・光明院)八葉、被懸下簾、兩院御直衣歟、}、南門前遙引離被立之、

御車寄人大宮大納言^{公名卿、衣、冠、下紵}、佇立御車右方、

北面五位一人奉連^{檜皮白裏、狩衣、}六位藤原親有^{縹狩衣、}中原友範、

^{二藍、}藤原秀国^{二藍狩衣、以上、下紵、帶劍、}各出居御車左方、東上北面、

^{但次第居廻之間、下臈脚東向之、}御牛飼等在御車後程、

頃之、新大納言^(三条実繼)以下着幄、大炊御門中納言^(家信)西斜着座、候御装束故也、弁不着之間、雖相尋之、終以不着^(審)、

次奧式筥、

外弁人々装束、

通冬^(中院)

玉冠^{緒二筋、一筋者自耳前引之、兩盞結垂之、有、露、今一筋者耳後引之、但入小袖頭中、}大袖・小袖

共浅紫^{蘇芳、裏生也}、唐綾也、縹裳^{薄物有縹文、同、色、平絹生裏}、表袴如常、

玉佩^{付、右}、短綬^{在、左}、赤地^錦○韞烏^{有黑文、伏組并栗、形在之、赤組緒、}

扇^{蘇芳、染之、}笏^{以木、作之、}

新大納言実繼卿^(三条)

玉冠^{緒一筋、自、耳前引之、}大袖^{麴、塵}、小袖^{黑、櫛}、縹裳^{無裏、有紵、}

表袴如常、玉佩^右、短綬^左、扇、烏同前、

松殿中納言忠嗣卿、

(一六丁)

玉冠^{緒一筋}、大袖・小袖共浅紫^{裏同色袂也、作蘇芳歟、}、唐綾歟、

紺裳^{無裏、無縫、}、玉佩、短綬以下如常、笏木歟、

大炊御門中納言家信卿、

玉冠^{緒一筋、自、耳前引之、}、大袖小袖共黒^{古物、有裏、也、}、縹裳^{有文、}、

玉佩右、短綬^{左、}如常、牙笏^{長、反、}、烏^{朱漆無文、伏、輪并栗形在之、}、

着様、各四寸許ツ、上テ着之、於幄^{近、}改沓、

高倉宰相廣通卿、

玉冠^{緒二筋、}、大袖小袖共浅紫^{色頗薄、只綾也、}、縹裳^{無裏、無縫、}、綬、

作物也、烏以下如常、

冷泉宰相經隆卿

玉冠^{緒一筋、}、大袖小袖共紫^{願有、黒色、}、縹裳、玉佩、綬

短綬、如常、

左兵衛府忠光着之云々^{装束等、不見及、}、鉾以下立之、

左右衛門府程隔之間不能記、但左佐經方着襦襦、火

長・隨身等同着襦襦、於看督長者不著之、至幄辺皆召

具之、

及晩召々使^{先之内弁幄之、問、其後召之、}、召使参進、兵ノ省可召之由

仰之、丞参進、鼓可令打之由仰之^{不下式筥、不問諸司、}、秉燭之後、召成

由陣官告之、仍次第起座、於幄中間^{件幄、七間、}、西行、当南門東扉

程、向西一揖^{件曲折揖事、寬弘行成卿、仁安諸卿揖、定房卿不揖云々、元曆土、御門内府通親公（于時参議）揖、其後仁治、寛元以来当家之輩多、}、

（一七丁）

以逐彼跡歟、而近來於南門溜辺揖之輩在之云々、仍有其難歟、有、折北々行、經

兵衛陣中、入東扉列立^{入夜之間、不練歩、}、異官重行、次叙人参入、次褰帳、

此間諸仗称警、仍諸卿磬折、次典儀唱再拜、次諸卿再

拜、次宣命使揖離列、北行北向揖、西行經式部位記二脚中^{依、}

^{上階、立、}、就版宣制三段再拜兩段、舞踏如例、次宣命使

揖後、經式・兵両案中、南行向南揖、東行經大納言列後、

立本列^{今夜宣命、使不練、}、次叙人給位記、拜舞即^{（退脱力）}、次典儀唱再拜、

次群官再拜、次親王代称礼畢、次垂帳、次擊退刀祢

鼓、次内弁令退給之後、外弁退了、